仮名の書の美

――『源氏物語』における筆跡描写に即して

加瀬 佳樹 （大阪教育大学）

本発表の目的は、『源氏物語』における仮名の書（以下、「仮名」とする）の筆跡描写に即して、筆跡美と人格美の関係の中で仮名の美を明らかにすることにある。

仮名は、平安時代に形成された平仮名（の書）、つまり「女手」を指す。「男手」としての真名――漢字と対置される「女手」としての仮名――平仮名は、国風文化を代表する一つの成果であった。簡素にして流麗なそのスタイルは、一字一音の大和言葉を書くに適する実用性に加えて、芸術性の面でもまた見事に洗練されていった。現在、ことに『高野切』を始めとした 11 世紀の仮名遺品は、書学に不可欠な古典として尊重される。

「書は人なり」という言葉は、筆跡と作者の人となりを結ぶ表現として知られる。知・情・意といった書き手の心の働きや身体性までをも含めて象徴するのが「書は人なり」の「人」である。良くも悪くも筆跡にはその人らしさが投影される。そのため、書は一概に美と相即する表現だとは言い切れないものでもある。しかし、「書は心画なり」や「心正しければ即ち筆正し」という箴言が示すように、従来、書の美の理想的な在り方は、人格との連関において追求されてきた。このことは「言葉を書く」ことに書の本質を看破した研究（石川九楊 2010）からも示唆されよう。しかしながら、書の人格性が言挙げされる一方で、筆跡美と人格美との関わりを示す研究は、今日でもあまり行われていない。日本の仮名は書論として著述された古典文献が存在しないことも相俟ってか、この傾向がより強いようである。

そこで本発表では、『源氏物語』を取り上げる。紫式部はこの作品の中で、登場人物たちの筆跡を様々に描いている。そのため、『源氏物語』に描写される筆跡を扱った論考は少なくはないが、筆者が本作品に焦点を当てるのは、理知的にして美的な才能を発揮した紫式部の言葉にこそ、人格美と分かち難い理想的な筆跡美のイメージが示されていると信じるからである。

本発表では、紫式部が理想とする仮名を「今めかしさ」の性質に求める主張（杉浦妙子 2007）へのアンチテーゼとして論を展開する。同論は、急速に発展する当時の仮名の姿を示す研究として参考になるが、これをそのまま紫式部自身の仮名の理想として錯認した節があるため再考の可能性がある。そこで本論ではまず、先行研究の問題点について論究したのち、「帚木」の記述をめぐって理性に基づいた紫式部の仮名の理想性を確認する。そして、紫式部が理想とした筆跡美を観る場（トポス）としての「梅枝」の正当性――価値実現と「女性の筆跡」の不当性――価値認識をそれぞれに論じる。その結果として、「梅枝」に記述される「男性の筆跡」において筆跡美と人格美の連関が論じられることになるが、とりわけここでは、光源氏の筆跡に託された美的イメージへの検討が、善美一如（カロカガティア）なる仮名の美を明らかにするための中心的な役割を果たそう。